

備前市歴史文化基本構想

平成26年3月

備前市教育委員会

はじめに

歴史文化基本構想とは地域内の文化財を総合的に把握し、周辺の自然環境なども含め総合的に保存活用していくための基本的な考え方です。地域の成り立ちやそのきずなの維持、人々の生活の中での文化財の保存やその根底にある知と技の継承がこの構想の基本的な考え方です。

備前市は閑谷学校や備前焼など豊かな歴史的な文化資源があります。これらの周辺の環境や自然を含めて長期的、計画的に活用するために策定したものです。

備前市教育委員会では、平成 23 年度から 25 年度にかけて合計 7 回の策定委員会と 5 回のワークショップを開催。構想案を策定後、パブリックコメントを経てまとめました。

構想の中では、この歴史的な文化資源を地域文化資源と名付け、これらを組み合わせることによって、7つのまとまりを設定しました。

- 1 学びの原郷閑谷学校と岡山藩主池田家の遺産
- 2 備前焼を生み、栄えるまち
- 3 近代漁業発祥のまちと食文化
- 4 中世山岳仏教の栄華とふるさと村の景観
- 5 耐火煉瓦産業で日本の近代化を支えたまち
- 6 映画と文学、「心象風景」の残るふるさと
- 7 交流と流通の要となった地

この 7 つのまとまりは「関連文化財群」と呼ばれ、備前市が歴史文化を活かしたまちづくりをするときの基本的な枠組みとなります。

最後になりましたが、本構想の策定について、ご指導・ご協力を賜りました文化庁・岡山県教育委員会ならびに備前市歴史文化基本構想策定委員会をはじめ、会議・ワークショップに参加していただいた多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

備前市教育委員会

教育長 土山 球 一

目次

はじめに

第1章	備前市歴史文化基本構想策定の概要	1
1	基本構想策定の経緯	1
	(1)豊かな文化遺産と観光資源、恵まれた地勢	1
	(2)文化財保護行政の基本施策の欠如	1
	(3)旧閑谷学校世界遺産登録推進とその後の課題	1
	(4)合併による地域的課題への対処	1
2	基本構想の施策上の位置	2
3	基本構想の目的	2
4	基本構想策定の経過	2
	(1)スケジュールと事業実施状況	2
	(2)検討体制	2
第2章	備前市の概要	7
1	備前市の環境	7
	(1)自然	7
	(2)社会	8
2	上位の計画および関連計画	9
	(1)備前市新総合計画	9
	(2)都市計画マスタープラン	9
	(3)備前市地域エネルギービジョン	9
	(4)史跡伊部南大窯跡整備基本構想	9
	(5)平成24年度備前市教育行政重点目標	10
第3章	備前市の歴史と地域文化資源	11
1	地域文化資源の概要	11
	(1)遺跡・史跡	11
	(2)植生・景勝地・天然記念物等	12
	(3)建造物など	13
	(4)伝統技術	14
	(5)民俗	15
	(6)芸能・文化など	17
2	備前市の歴史と地域文化資源の特性	19
	(1)山や川、海、平野などの地勢から交通・流通の拠点となった地域	19
	(2)窯業を礎に発展してきた産業構造をもつ地域	19
	(3)恵まれた自然から生み出される産物を生かした食文化が育まれた地域	19
	(4)多数の文化人を輩出し、また現代でもそれが進行している地域	20
	(5)江戸時代に特色のある人材育成のための学校が置かれ、 現在まで守り続けられている地域	20
第4章	関連文化財群の設定	21
1	学びの原郷閑谷学校と岡山藩主池田家の遺産	21
2	備前焼を生み、栄えるまち	22
3	近代漁業発祥のまちと食文化	24

4	中世山岳仏教の栄華とふるさと村の景観	26
5	耐火煉瓦産業で日本の近代化を支えたまち	27
6	映画と文学、「心象風景」の残るふるさと	28
7	交流と流通の要となった地	30
第5章	歴史文化基本構想の基本方針	39
1	地域文化資源を次世代へ確実に継承	39
2	地域文化資源の活用	39
3	情報発信と観光	39
第6章	現在までの取組みと課題	41
1	現在までの取組み	41
(1)	調査・研究等	41
(2)	文化財の指定・登録	43
(3)	地域文化資源の活用と観光	48
(4)	地域文化資源に関する情報発信	49
(5)	市民の取組み	51
2	地域文化資源の活用に関わる課題	51
(1)	全国的ブランドの地域文化資源の保存と活用	51
(2)	市民グループ、研究者、民間企業、私立美術館等の連携による仕組みづくり	51
(3)	連携した人が「豊かさ」を感じられる事業推進	52
第7章	地域文化資源を総合的に活用するためのメニュー	53
1	市全体で考える保存と活用	53
(1)	地域文化資源の総合目録づくり	54
(2)	市指定文化財の精査と国・県指定・選定の推進	54
(3)	関連文化財群の活用と歴史文化保存活用区域の設定	54
(4)	文化施設の現状分析と将来的展望	55
(5)	歴史民俗資料館、加子浦歴史文化館、地域公民館等との情報共有・発信	56
(6)	小・中学校における地域学習の推進	59
(7)	市民グループ、行政職員等の連携と専門職員の人材育成	59
(8)	ガイダンス機能の拡充と「歴史と文化よろず相談所（仮称）」の設置	60
(9)	現代の文化センターと昔の文化センター「寺社」との連携	60
(10)	関連文化財群の情報発信	60
2	地域文化資源の保存と活用	61
(1)	関連文化財群「学びの原郷閑谷学校と岡山藩主池田家の遺産」の保存活用	61
(2)	関連文化財群「備前焼を生み、栄えるまち」の保存活用	61
(3)	関連文化財群「近代漁業発祥のまちと食文化」の保存活用	61
(4)	関連文化財群「中世山岳仏教の栄華とふるさと村の景観」の保存活用	62
(5)	関連文化財群「耐火煉瓦産業で日本の近代化を支えたまち」の保存活用	62
(6)	関連文化財群「映画と文学、「心象風景」の残るふるさと」の保存活用	62
(7)	関連文化財群「交流と流通の要となった地」の保存活用	62
第8章	備前市歴史文化基本構想の課題と今後の展開	73
1	課題	73
2	展開	73

第1章 備前市歴史文化基本構想策定の概要

1 基本構想策定の経緯

(1) 豊かな文化遺産と観光資源、恵まれた地勢

備前市は「閑谷学校」、「備前焼」など豊かな歴史的文化資源をもつ地域である。この豊かな文化資源を次世代に確実に引継いでいくために、今に生きる人ができることは何か、明確に提示することが求められている。それがゆるやかな歩みであっても、着実に実施していくことによって次世代の未来が開ける。

(2) 文化財保護行政の基本施策の欠如

備前市は豊かな歴史的文化資源をもつ地域でありながら、地域の特性を生かした文化財の総合的な施策を策定していない。地域文化の振興やまちづくりが盛んにいわれている中、地域の個性でもある文化遺産をいかに守り、活用し、後世に引継ぐか、この明確な方向性をもつことは行政の責務である。つまり、文化のマスタープランとも呼べる施策が必要なのである。

(3) 旧閑谷学校世界遺産登録推進とその後の課題

平成19年、岡山県及び岡山市、赤磐市、備前市、和気町は「世界遺産暫定一覧表候補」への記載を目指し、閑谷学校を含む14の資産を「近世岡山の文化・土木遺産群－岡山藩郡代津田永忠の事績－」として文化庁に共同提案した。しかし、平成20年、「カテゴリーII(大幅な見直しを要するもの)」に該当するとの結果となり「世界遺産暫定一覧表」には掲載されなかった。ただし、「旧閑谷学校とその関連資産」については、「近世の教育資産」として将来的に「世界遺産暫定一覧表」に記載される可能性があるとして、「世界遺産暫定一覧表候補の文化資産」のうち「カテゴリーIb」に分類された。

平成20年9月に出された文化庁の審議結果に対して、備前市は専門委員の指導を受けながら「旧閑谷学校単独の提案書」を作成し、平成24年4月文化庁へ提出した。これに対する文化庁の指示事項を待たなければ今後の調査研究方針が固まらないことが1番目の課題である。また、文化庁への提案書のコンセプトである「閑谷で世界の人々に学ぶ喜びを感じてもらおう」ために取り組む事業を具体化していくことが課題の2番目として挙げられる。

(4) 合併による地域的課題への対処

平成17年3月22日、和気郡日生町、吉永町、および備前市は合併を行い、「海とみどりと炎のまち～ひとが元気、笑顔あふれる～」を基本理念として新備前市のまちづくりが進められた。合併協議では「市・町指定文化財」は新市にそのまま引継ぐこととなり現在に至っている。しかし、合併以前、日生町、吉永町、備前市ではそれぞれの独自の基準で文化財の指定制度を運用していたため、合併後の指定文化財を概観したとき、指定要件のアンバランスさを看過できない事態になっている。

さらに文化財を公開・活用する文化施設では、日生町に加子浦歴史文化館、吉永町に吉永美術館、備前市に歴史民俗資料館、埋蔵文化財管理センターがあり、地域文化の発信拠点として企画展や講座などを実施してきた。しかし、同種の施設ということもあり、施設の再編成は否めない状況となっている。

2 基本構想の施策上の位置

現在策定中である「備前市総合計画」の基本理念に基づき、各担当部局が具体的施策として各種事業を計画実施していくが、その中で文化財保護行政の担当部局が文化財保護・活用の総合的指針として基本構想を策定するものである。従って基本構想は都市計画マスタープラン、備前市地域エネルギービジョンなど各種施策と整合性を保ちながら、歴史、文化、それを取りまく環境を生かしたまちづくりを進めるための計画となる。

3 基本構想の目的

備前市は豊かな歴史的文化的文化資源に恵まれた地域であり、これらを周辺の環境や自然を含めて長期的、計画的に活用するため「備前市歴史文化基本構想」を策定する。さらに構想を着実に進めることによって到達する将来像を「恵まれた自然、歴史、文化を活かして幸せに暮らす」と設定する。

4 基本構想策定の経過

(1) スケジュールと事業実施状況 【表1-1・2】

備前市は、平成23年度から2ヵ年計画で事業に着手し、各種調査や構想策定を行った。平成23年度当初に策定委員会を設置し、策定委員会と3回のワークショップを実施するとともに、寺社等に所在する仏像の悉皆的調査、指定文化財等の管理台帳整備を実施した。平成24年度は策定委員会と2回のワークショップを行った。

市民が参加し地域の歴史を共に考えていき、さらに事業の周知も図るべく、すべての委員会を公開とし、さらに策定委員会後には参加者とともに地域を歩くワークショップを開催した。また、平成25年7月には策定案をパブリックコメントに諮った。

(2) 検討体制

備前市では、備前市歴史文化基本構想策定委員会条例（備前市条例第13号 平成23年4月1日施行）により、備前市歴史文化基本構想策定委員を委嘱し、歴史文化基本構想の検討を行った。

本委員会は、平成23年度に3回、平成24年度に3回、平成25年度に1回、計7回の策定委員会を開催した。



伊部地区でのワークショップ平成23年7月24日

○平成 23・24・25 年度 備前市歴史文化基本構想策定委員会

委員長 上西節雄（吉兆庵美術館顧問）

副委員長 岡本知恵子（備前市市民代表）

委員 倉地克直（岡山大学大学院社会文化科学科教授）

委員 狩山俊悟（倉敷市立自然史博物館主幹：植物担当学芸員）

委員 岩崎充宏（山陽新聞社文化部副部長）

指導・助言 横山 定（岡山県教育庁文化財課文化財保護班副参事）

備前市教育委員会事務局

教育長 土山球一

教育次長 竹中史朗（～平成 24 年 3 月 31 日）

岩崎 透（平成 24 年 4 月 1 日～）

生涯学習課課長 末長章彦（平成 24 年 4 月 1 日～副参与）

有吉隆之（平成 25 年 4 月 1 日～9 月 30 日）

星尾靖行（平成 25 年 10 月 1 日～）

課長補佐 杉田和也（平成 24 年 4 月 1 日～課長代理）

主 幹 横山裕昭（平成 25 年 5 月 1 日～：10 月 1 日～副参事）

文化係長 石井 啓（平成 23 年 4 月 1 日～主幹）

主 査 山本久美子

主 査 重根弘和（～平成 25 年 3 月 31 日）

歴史民俗資料館 学芸員 井上靖子（平成 24 年 4 月 1 日～）

○策定委員会の経過

第 1 回 平成 23 年 7 月 24 日（日） 会場：備前焼伝統産業会館

議題 ①委嘱状交付 ②事業概要の説明 ③構想策定の方針

第 2 回 平成 23 年 12 月 4 日（日） 会場：岡山県青少年教育センター閑谷学校

議題 ①具体案協議

第 3 回 平成 24 年 3 月 17 日（土） 会場：日生防災センター

議題 ①具体案協議 ②文化庁主催研修会の報告

第 4 回 平成 24 年 7 月 16 日（月） 会場：八塔寺山荘

議題 ①事務局案による具体案の協議

第 5 回 平成 24 年 10 月 8 日（月） 会場：三石出張所

議題 ①事務局案による具体案の協議

第6回 平成25年2月16日(土) 会場:リフレセンターびぜん

議題 ①最終案の協議

第7回 平成25年8月27日(火) 会場:備前保健センター

議題 ①最終案の確認

○備前市条例第13号

備前市歴史文化基本構想策定委員会条例

(目的及び設置)

第1条 文化審議会文化財分科会企画調査会報告書の提言に基づき市の文化財をその周辺の環境も含めて総合的に保護し、及び活用するための基本的な方針(以下「歴史文化基本構想」という。)の策定を目的として、備前市歴史文化基本構想策定委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(所掌事項)

第2条 委員会の所掌事項は、次のとおりとする。

- (1) 歴史文化基本構想の策定に関すること。
- (2) 前号に掲げるもののほか、歴史文化基本構想の策定に必要なこと。

(組織及び委員)

第3条 委員会は、委員5人以内をもって組織し、委員は、文化財に関し高い識見を有する者のうちから教育委員会が委嘱する。

2 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会に委員長及び副委員長各1人を置き、委員の互選により定める。

- 2 委員長は、委員会を代表し、会務を総括する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき、又は委員長が欠けたときはその職務を代理する。

(会議)

第5条 委員会の会議は、委員長が必要に応じ招集し、会議の議長となる。

- 2 会議の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 3 委員会は、会議において必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

(委任)

第6条 この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

(施行期日)

- 1 この条例は、平成23年4月1日から施行する。

表1-1 平成23年度の事業内容

名 称	期 間	実施主体	内 容
ワークショップ 「焼き物のまちを歩く」	平成23年7月24日	備前市教育委員会 生涯学習課	八塔寺ふるさと村を歩いた。 西の高野山とも呼ばれ中世には 72ヶ寺もあったといわれる地域が 昭和49年「ふるさと村」として現 代の景観になった移り変わりを 地元参加者とともに考えた。
ワークショップ 「世界遺産を目指す 旧閑谷学校周辺の 環境を考える」	平成23年12月4日	備前市教育委員会 生涯学習課 旧閑谷学校世界遺産 登録推進委員会	世界遺産登録を目指す閑谷学 校からバッファゾーンと想定され る石門付近までを江戸時代の絵 図をもとに旧道を歩き、現在の閑 谷学校周辺の景観を参加者で 考えた。
ワークショップ 「港町日生を歩く」	平成24年3月17日	備前市教育委員会 生涯学習課	日本の近代漁業発祥の地日生 の中で、大多府島を歩いた。元 禄防波堤、灯籠堂石塁などの指 定文化財、独特の植生をもつ自 然遊歩道、廃校になった大多府 小学校などを歩き、日生の魅力 を考えた。
総合文化財調査 (仏像調査)	平成23年4月19日 ～ 平成24年3月31日	備前市教育委員会 生涯学習課 友野印刷株式会社 備前市歴史資料調査員	備前市内29寺院のうち22寺院、 約370体の木造仏像調査を実施 し報告書を作成。 岡山県緊急雇用創出事業臨時 特例基金からの交付金を受け、 委託事業として実施。
指定文化財管理台帳の 整備	平成23年4月1日 ～ 平成24年3月31日	備前市教育委員会 生涯学習課	デジタルデータ化した指定文化 財管理台帳の整備、アナログ データとの整合を行った。
関連文化財群調査	平成23年4月1日 ～ 平成24年3月31日	備前市教育委員会 生涯学習課	これまで実施してきた様々な調 査や指定文化財管理台帳をもと に関連文化財群を抽出する作 業を行った。
社会教育委員の会議の 協議 「市内の文化施設の 状況について」	平成23年7月7日	備前市教育委員会 生涯学習課	平成23年度第1回社会教育委 員の会議で協議事項として「市 内の文化施設の状況について」 委員の方々から意見をいただ いた。

表1-2 平成24年度の事業内容

名 称	期 間	実施主体	内 容
ワークショップ 「中世山岳仏教の栄華を偲ぶ、ふるさと村を歩く」	平成24年7月16日	備前市教育委員会 生涯学習課	八塔寺ふるさと村を歩いた。西の高野山とも呼ばれ中世には72ヶ寺もあったといわれる地域が昭和49年「ふるさと村」として現代の景観になった移り変わりを地元参加者とともに考えた。
ワークショップ 「日本の近代化を支えた耐火煉瓦の街を歩く」	平成24年10月8日	備前市教育委員会 生涯学習課	耐火煉瓦工業で日本の近代化を支えた三石地区を地域の人と歩いた。四列穴門、耐火煉瓦工場、三石小学校講堂など近代化遺産と現在の景観を考えた。
指定文化財管理台帳の整備	平成24年4月1日 ～ 平成25年3月31日	備前市教育委員会 生涯学習課	デジタルデータ化した指定文化財管理台帳の整備、アナログデータとの整合を行った。
関連文化財群調査	平成24年4月1日 ～ 平成24年9月30日	備前市教育委員会 生涯学習課	これまで実施してきた様々な調査や指定文化財管理台帳をもとに関連文化財群を抽出する作業を行った。
備前市の植物目録の作成	平成24年4月1日 ～ 平成25年1月31日	倉敷市立 自然史博物館	日生地域、吉永地域、備前地域を網羅する新たな植物目録を作成。

第2章 備前市の概要

1 備前市の環境

(1) 自然

備前市は、岡山県南東部、兵庫県との県境に位置している。市域の面積は258.24 km²、岡山県の中で3.6%を占める。市域の北部、吉永地域は東は兵庫県佐用郡佐用町、赤穂郡上郡町に接し、北は美作市に接する南北に長い地域である。市域の南東部日生地域は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に臨む。備前地域の西は和気町、赤磐市、岡山市、瀬戸内海に接する。階段状に降下する山々が直接海に至る典型的な沈降海岸の地形で、沖合には鹿久居島、頭島、大多府島、鶴島などからなる日生諸島が展開する。地質は流紋岩類で、砂浜は少なく、岩が切り立った海蝕崖や勘三郎洞窟などの海蝕洞が多く見られる。備前地域の西部、香登地区から新庄地区にかけては吉井川左岸に当たり沖積平野の平坦地が広がる。伊部地区から三石地区にかけては急峻な山並みが続く、平坦地が谷に沿って細長く開けている。これは埋積谷とよばれる地形で、後氷期の海面上昇によって瀬戸内海に入り込んだ海水によって谷が沈水し「おぼれ谷」になるのに対し、海水の侵入が緩やかで堆積作用が優勢である場合に形成される地形である。片上大橋がかかる片上湾はおぼれ谷の典型で、その縁辺部の鶴海地区、久々井地区、浦伊部地区、片上地区、穂浪地区などに埋積谷の細長い平坦地が形成される。山地の部分は市域総面積の2/3以上をも占める。その地質は流紋岩や石英斑岩等である。流紋岩地域は花崗岩地域にくらべて、樹木が再生しやすく、アカマツ林が広く発達する。

気候は瀬戸内式気候に属し、平成20年から平成22年の年平均気温14.8度、年間降水量1,183.5 mmとなっている。昭和49年、51年、平成2年などには台風による集中豪雨によって甚大な被害を受けた。

沖積平野の平坦地は市街地や造成地、水田、畑地などとして利用されている。河川沿いには狭いながらもヨシやマコモなどからなる河辺植生があり、河口部にはウラギク、シバナ、ハママツナなどの塩生植物が生える干潟がわずかに見られる。海岸線は複雑に入り組み、砂浜やれき浜、磯浜などがあるが、市街地付近ではほとんど自然海岸は残されていない。砂浜に生えるハマナツメは岡山県内では備前市だけでしか生育が確認されていない。伊部地区や三石地区、閑谷地区のため池には、サンショウモ、サイコクヌカボ、チョウジソウなどの絶滅危惧種が生育していることがある。閑谷学校の周辺地域や伊部・三石地区の市街地背後の丘陵地、八塔寺地区など、丘陵地の多くはアカマツ林であるが、松枯れなどによって次第にアベマキ、コナラを主体とした夏緑広葉二次林に遷移しつつある。佐山地区、久々井地区、鹿久居島などには丘陵地の一部に湿地があり、モウセンゴケ類やミミカキグサ類などの食虫植物が見られる。大内地区の福生寺周辺や吉永町加賀美の日吉神社周辺、久々井の八幡宮周辺、麻宇那の石立神社周辺などでは潜在自然植生と考えられるシイノキやカシ類を優占種とする常緑広葉樹林が残存している。日生諸島や日生町日生の高良八幡宮周辺のように、島嶼部や本土側の海に面した急崖地ではウバメガシが優占する海岸林が見られる。丘陵地の一部にはスギ、ヒノキの植

林地や竹林が見られる場所もある。

「岡山県版レッドデータブック 2009」に掲載された植物のうち、シモツケヌリトラノオ、オオカナメモチ、ハマナツメ、コケセンボンギク、カシダザサ、ミカワシンジュガヤ、ウチョウランは、備前市以外の分布地点が示されていない希少種または絶滅種である。

鹿久居島はニホンジカの繁殖地としてよく知られている。最近では全国的にニホンジカが分布を広げ、岡山県でも県域東部の広い範囲に見られるようになって、個体数も増加している。日生海岸・日生諸島は旅鳥の探鳥地として知られ、カモ類、シギ類、カモメ類、イソヒヨドリ、オオジュリンなどが見られる。市域北部の吉永地域加賀美・多麻地区ではモリアオガエルの生息が確認され、繁殖期には泡で包まれた卵塊を樹上で見ることができる。昆虫類では鹿久居島が暖地性の種の多い島として知られている。吉永地域多麻地区の滝谷神社社叢ではヒメボタルの発生が知られている。

(2) 社会

①人口

備前市の人口は平成 24 年 8 月現在、38,244 人、平成 22 年対比で 758 人(2%)減少している。世帯数では 15,973 世帯に増加しているものの、平成 20 年から平成 23 年と比べるとほとんど変化がない。また、階層別の人口比率では、高齢化率も国の平均よりも相当早いペースで進行している。

②産業

備前市の産業で農業分野では平成 22 年度の水稲作付面積が 375ha、生産量 1,840 t である。岡山県全体と比べると、米の比率が多く、畜産比率が低いことが特徴である。

漁業は日生地域をはじめ主要産業で、平成 21 年の漁獲量は 446 万 t となっている。

林業では、森林面積のうち、人工林が 19%、天然林が 80%となっている。

備前市の基幹産業は窯業で、セラミック、耐火煉瓦工場などが片上、三石、伊部地区に集中している。平成 22 年の耐火煉瓦関連の市内事業所は 20 ヶ所、県内生産量は約 24 万 2 千 t、出荷額は約 356 億円である。平成 21 年の工業は、事業所数 2,234、従業員数 20,185 人となっている。

商業分野の平成 19 年の統計では、商店数 623 店、従業員数 2,797 人、商品販売額約 6 億円となっているが、全体に減少傾向がみられる。

本構想に最も関連する観光の分野であるが、平成 23 年が約 32 万人となっており平成 18 年と比較すると約 9 万人(約 21%)の減少となっている。岡山県でも平成 23 年は 2,337 万人、前年対比 7%減少と平成に入り最少となっている。

③土地利用

備前市の面積は 258.24 km²、森林が 76.6%、宅地が 8.7%で、一定の広さをもつ平地に乏しい。

2 上位の計画および関連計画

(1) 備前市新総合計画

まちづくりの目標となり市の将来像が示される基本構想、その構想で示される将来像を実現するために必要な施策・計画目標からなる基本計画、その計画に示された施策を実現するため財政的裏付けを示した実施計画からなる。いわば行政サービスのメニューと呼ばれるもので、平成 25 年度から平成 34 年度が計画期間となる。現在策定中であるが、「備前らしさ」のあふれるまちを基本理念とし、この計画で目指す将来像を『古くて新しい「教育のまち備前」』と設定している。さらに「～学びの原郷 閑谷学校が開かれたまち～」という副題がつけられている。伝統的地名である「備前」を生かした「備前らしさ」をまちづくりの中心に据えるということで、合併後のさらなる一体感の醸成も意図されている。市民が、備前市の歴史、伝統文化を再認識し、大切に守り生かし、地域に誇りや愛着を持つという志の高い考え方から策定が進められている。

(2) 都市計画マスタープラン

都市計画マスタープランは都市計画の観点から長期的な視点に立って、地域における動向に対応し、上位計画である備前市総合計画や備前市国土利用計画、備前市都市計画区域の整備などとの整合を図りながら将来の都市計画に関する基本的な方針を定めるものである。つまり都市計画に関する基本的な方針で、市民にわかりやすい都市の将来像を示すことで備前市におけるまちづくりの指針となり、市民と行政による協働のまちづくりに活用される役割を担う。平成 18 年度から平成 28 年度が計画期間となる。

(3) 備前市地域エネルギービジョン

備前市は、平成 19 年 3 月に「備前市環境都市宣言」を行い、循環型社会の実現を目指して、市民、企業、行政の協働によるやさしいまちづくりを推進している。また平成 17 年度より環境省の「環境と経済の好循環のまちモデル事業」に採択され備前みどりのまほろば協議会などを立ち上げ新エネルギー・省エネルギー事業の展開が進められている。そういう背景の中、環境にやさしいまちづくりの指針として策定されたもので、平成 20 年度から平成 39 年度が計画期間となる。

(4) 史跡伊部南大窯跡整備基本構想

国指定史跡「伊部南大窯」(当時の呼称)をはじめ伊部地区にある備前焼の窯跡群をまちづくりの中でどのように活用していくかビジョンを示したもので平成 17 年に策定された。構想に基づき作業を進める中、平成 21 年には伊部南大窯跡が市指定「備前西大窯跡」、「備前北大窯跡」とともに「名称変更と追加指定」を受け、国指定史跡「備前陶器窯跡」となった。新たな保護の枠組みはできたが、構想に基づく「整備」には着手しておらず、事業計画のスケジュールの再検討を行っている。

(5) 平成 25 年度備前市教育行政重点目標

重点目標は、教育委員会で毎年策定されるもので、各課、施設の目標が具体的に明示されている。平成 25 年度の基本方針のひとつは、『「人づくり」は地域の力、未来への力となるという観点に立って、学校教育、生涯学習・社会教育、公民館活動、スポーツ・レクリエーション活動の充実に努めていきたい』とうたっている。

第3章 備前市の歴史と地域文化資源

1 地域文化資源の概要

この章では、地域文化資源を「歴史・文化・自然など地域を特徴づけるもの」と定義づける。その抽出作業の便宜的区分として、「遺跡・史跡」、「植生・景勝地・天然記念物等」、「伝統技術」、「建造物」、「民俗・食文化」、「芸能・文化」などを掲げるが、悉皆の調査を行っていないものが多いのでそのすべてを提示するものではない。

(1) 遺跡・史跡

備前市は、岡山県南東部、兵庫県との県境に位置している。市域の北部吉永町は、東は兵庫県佐用郡佐用町、赤穂郡上郡町に接し、北は美作市に接する南北に長い地域である。吉永町和意谷には、国指定史跡「岡山藩主池田家墓所」が所在する。市域の南東部日生町は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に臨む。沖合には鹿久居島、頭島、大多府島、鶴島などからなる日生諸島が展開する。鹿久居島には中世の拠点的な遺跡と考えられる「千軒遺跡」があり、江戸時代には岡山藩の流刑場が設けられた。鹿久居島の南側には、見付島という無人島があり、重罪犯の処刑場となっていた。

備前地域の西は和気町、赤磐市、岡山市、瀬戸内市に接する。備前地域の西部香登から新庄にかけては吉井川左岸にあたり沖積平野の平坦地が広がり、低丘陵上には国指定史跡「丸山古墳」をはじめとする古墳群が点在する。伊部から三石にかけては急峻な山並みが続き、平坦地が谷に沿って細長く開けている。三石では、ろう石採掘のため山の端が鋭利な台山が目を引くが、その東側の城山山頂には、備前守護赤松氏の守護代浦上氏の居城、県指定史跡「三石城跡」がある。

片上湾は、後氷期の海面上昇によって瀬戸内海に入り込んだ海水によって谷が沈水した「おぼれ谷」の典型で、その縁辺部の鶴海、久々井、浦伊部、片上、穂浪などに埋積谷の細長い平坦地が形成される。そのひとつ片上には西日本の縄文時代中期末の集落遺跡として著名な長縄手遺跡^{ながなわて}が所在する。山地の部分は市域総面積の2/3以上をも占め、多くは流紋岩地域である。花崗岩地域にくらべて、樹木が再生しやすく、アカマツ林が広く発達する。慶長期に描かれた「備前国図」には伊部付近に松林が描写されている。この流紋岩から生成される山土や堆積した「田土」などは備前焼の原料粘土として使用され、独特の味わいを器表に描き出す。この豊かな山林資源、原料の粘土、水運に恵まれた立地などが、中世以降、窯業史を飾る「備前焼」を生み出すことになる。

さて、備前市において最も古い時期の遺物・遺跡は亀井戸廃寺^{よこじょうはくへん}の調査の際確認されたサヌカイト製ナイフ形石器と翼状剥片で、旧石器時代に属するものであるが、遺構に伴うものではない。

続く縄文時代では、早・前期には吉井川河口や島嶼部に貝塚が点在するが、備前では中期末の集落が確認された片上の長縄手遺跡、後期前半の新庄西畑田遺跡などが知られる。

弥生時代では竪穴住居や大溝などが確認され、母村的集落が想定されている、前期後半から中期中頃まで継続した畠田の船山遺跡などがある。

古墳時代では吉井側西岸の浦間茶臼山に続いて、全長 68m を超える前方後円墳の長尾山古墳が築かれ、これに続いて 40m を超える大形円墳、新庄天神山古墳、丸山古墳、小丸山古墳などが展開する。国指定史跡「丸山古墳」は吉井川東岸の丘陵上に立地する造りだし付の円墳で、^{はくさい}船載三角縁神獸鏡など 30 数面の鏡が出土したことで知られる。内部主体を横穴式石室とする後期の古墳は石室長 9.5m の池灘古墳をはじめ大内地区を中心に 10 数基の大滝道古墳群、香登本の谷筋に展開する奥谷古墳群などが知られ、その後の香登廃寺への建立につながる。

また、市域の南西部、瀬戸内市長船町に接する佐山地区は、中国地方で最大の須恵器窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置する。佐山では遅くとも 7 世紀末ごろには生産が開始され、奈良時代に最盛期を迎え、平安時代後半まで続けられるが、その後はこの地で生産がされなくなる。それに呼応するかのよう^かに伊部の地で本格的に備前焼の生産が開始される。その後の備前焼の窯業としての展開は、伝統技術の項目で詳述する。

(2) 植生・景勝地・天然記念物等

市域の記念物として、市指定の名勝が 3 件、県指定の天然記念物が 1 件、市指定の天然記念物が 9 件ある。

市指定名勝 3 件のうち、「高取家の庭園」(吉永町神根本：昭和 36 年指定)は、江戸時代中期の遠州流廻遊庭園である。「大滝山・熊山」(伊部・大内・香登本：昭和 46 年指定)は、熊山の中腹にある大滝山福生寺を中心とする地域で、モミ、スダジイ、スギなどからなる自然度の高い樹林が残されている。「深谷の滝」(三石：昭和 46 年指定)は、石塔山を源とする二段滝で、上の段にあたる雄滝は幅 2 m あまり、落差が 13m ほどある。

県指定天然記念物「住吉島の樹林」(鶴海：昭和 39 年指定)は、流紋岩からなる周囲 290m の小島にウバメガシが群生している。市指定天然記念物 9 件のうち、「ヒメボタル」(吉永町多麻：昭和 52 年指定)は、滝谷神社の社叢内に生息が確認されているホタルの一種で、陸生貝をえさとする森林性の昆虫である。「金彦神社社叢」(吉永町金谷：昭和 52 年指定)は、社叢内にはスギやモミ、カヤ、アラカシ、ケヤキ、ムクノキの巨樹が生育するほか、ヤマモミジ、サルスベリ、モッコクなどの老木が見られる。「椎の樹林」(久々井：昭和 53 年指定)は、久々井八幡宮社叢の自然林で、150 本ほどのシイノキからなる。「コウヤミズキ自生地」(吉永町高田：昭和 53 年指定)は、八塔寺川と大藤川との合流点下流にあり、早春に花を咲かせるコウヤミズキが群生する。「高良八幡の社叢」(日生町日生：昭和 55 年指定)は、ウバメガシが優占する海岸林で、瀬戸内沿岸の海岸植生をよくとどめている。「西願寺のボダイジュ」と「西願寺のイチョウ」(日生町寒河：昭和 57 年指定)は、西願寺境内にある巨木で、ボダイジュは幹周が 240cm、樹高が 11m、イチョウは幹周が 340cm、樹高が 14m ある。「おがたまの木」(吉永町吉永中：平成元年指定)は、吉永小学校の校庭にあり、樹冠がかなり痛んでいるが、幹周が 190cm、樹高が 10m あり、オガタマノキとしては巨木である。「モリアオガエル」(吉永町加賀美・多麻：平成 14 年指定)は、梅雨時に泡状の卵塊を葉や木の枝などに産み付ける両生類で、加賀

美・多麻地区にある数か所のため池のほとりで産卵が見られる。

郷土の優れた自然を保護することを目的に、岡山県では自然保護地域を指定している。市域には郷土自然保護地域として大滝山(大内・伊部)、和意谷(吉永町和意谷)、松尾山(吉永町南方)、八塔寺(吉永町加賀美)、郷土記念物として高良八幡の森(日生町日生)、滝谷神社の樹林(吉永町多麻)がある。

大滝山郷土自然保護地域は、流紋岩を母岩とする急峻な地形を形成し、県南地帯最高峰の熊山に連なっている。一帯は、アカマツ、スギ、モミ、スダジイ、カクレミノ、ヤマツバキ等の常緑広葉樹と針葉樹が混交する樹林であり、また、野鳥の生息環境としても良好である。和意谷郷土自然保護地域は、岡山藩主池田家歴代の墓所を含む地域で、周囲を険しい山林に囲まれている。参道と墓所を取り巻く樹林は、コナラ、アベマキ、タカノツメ、ウラジロノキ、ウリカエデなどの落葉樹に、アラカシ、ナナメノキ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹が混交して形成され、一部にモミ、ツガなど針葉樹の大木が点在している。また、低木にモチツツジ、コバノミツバツツジ、アセビ、コガクウツギなどがあり、四季折々に変化する自然環境と歴史的遺産とが一体となって良好な景観を形成している。松尾山郷土自然保護地域は、松尾山を中心に流紋岩を母岩とする地質であるため、全般的にせき悪な土壌となっている。山麓にある松本寺の周辺は、アカマツを主体として下層にコバノミツバツツジ、ネジキ、コシダなどが生育し、県南部の代表的な植生を示している。八塔寺郷土自然保護地域は、山岳仏教の栄えたところで、八塔寺の地名とともに寺院と遺蹟からその歴史をうかがい知ることができる。一帯の植生は、コナラ、ソヨゴ、コバノミツバツツジなどを交えるアカマツ林が大半を占めているが、日吉神社を取り巻くようにシラカシ、スダジイなどからなる常緑広葉樹やモミの天然林、樹齢600年以上と推定されるシイの古木が残されている。また、クロバイ群落やサギソウ、トキソウなどの生育する湿生植物群落等も見られ、変化に富んでいる。

郷土記念物高良八幡の森は、日生港の東岸に突出した岬にある高良八幡神社を取り巻く樹林で、ウバメガシを主にヤブツバキ、シャシャンボ、カナメモチ、ネジキ、ヒサカキ、クチナシ等が混生し、瀬戸内海沿岸の自然植生の一部をよく表わしている。樹高15m、胸高直径40cmにおよぶウバメガシも見られ、典型的なウバメガシ林として貴重なものである。また日生港を見渡す絶好の展望地として地域の人々に親しまれている。郷土記念物滝谷神社の樹林は、滝谷神社を取り巻く樹林にモミ、ツガ、スダジイを主体として、コナラ、アラカシ、ツバキ、ツルシキミなどの植物も多く生育し、初夏の風物詩といえるヒメボタル(別名キンボタル)も生息するなど、学術的にも貴重な存在となっている。

(3) 建造物など

備前市内に所在する建造物は、悉皆的調査がなされていないため指定文化財、近代化遺産でリスト化されているものが記述の中心になる。国県市指定文化財総数は、平成24年の時点で国7件、県2件、市14件、計23件である。近代化遺産の調査で取り上げられた遺産の数は57件で、2次調査の対象となったのは旧山陽鉄道三石付近のアー

チ橋群など 19 件である。

さて、岡山県内の国宝建造物といえば吉備津神社(岡山市)と旧閑谷学校講堂の 2 件のみである。閑谷学校はこの講堂を含めて閑谷神社、旧閑谷学校聖廟、旧閑谷学校石塀など全部で 25 棟が国指定重要建造物で、さらに津田永忠宅跡、黄葉亭を加えた範囲が国の特別史跡になっている。このほかの国指定建造物では、大滝山三重塔、真光寺三重塔・本堂がある。

県指定建造物では平成 10 年代の新しい指定になるが、大滝山福生寺本堂、仁王門などがある。

市指定建造物は 14 件ある。吉永地域では神根神社本殿、松本寺本殿の 2 件、日生地域では 17 世紀中頃建築でその後移築されたという西念寺表門の 1 件、備前地域では御滝山真光寺仁王門、天津神社本殿、日光山正楽寺山門など 11 件で、備前地域の指定件数が多い。中には江戸時代の連房式の備前焼焼成窯の上部構造をその一部に残す「天保窯」の建造物指定というのものもある。

備前地域には真言宗の寺院が多いこともあるが、市内に 2 件の国指定三重塔があり、さらに市指定建造物が市指定全体の約 13%、市指定のみの対比でも 18% も占めるといふ特徴がある。全県的にも、岡山市、津山市などについて市指定建造物の件数が多い。

近代化遺産でリスト化されたものは、三石の耐火煉瓦産業関連が多く、片上の港湾施設などもある。惜しむらくは平成 15・16 年度の調査後、二次調査の対象となった「旧藤田組石積み場(片上)」、「旧万代医院(片上)」が相次いで解体された。さらに、岡山県の耐火煉瓦発祥地である三石のシンボルのひとつ「旧日本耐火煉瓦株式会社煙突(八角煙突)」も近年姿を消した。

石造美術の 7 件は、松本寺、長法寺などの石造宝篋印塔が 3 件、吉永町加賀美にある中世行者関連の「石小(子)詰の塚」、岡山県内で最古の文永年間の年号をもつ「倉吉の板碑」などがある。

以上国県市指定文化財、近代化遺産リストを中心に備前市内の建物を概観したが、京都の池田家菩提寺から和意谷の墓所へ池田輝政・利隆らの遺骸を移動する際仮安置されたという鏡石神社の建造物群など未指定建造物にも重要なものがあり、悉皆的調査が必要である。

(4) 伝統技術

伊部地区の一带は古くより焼き物の産地として知られていて、現在でも 200 人を超える窯元や作家がその伝統を受け継いでいる。炎により器の表面に描き出された独特の味わいは、釉薬を使わない焼締め陶として全国の方々に愛好されている。毎年 10 月の第 3 土・日に開かれる「備前焼まつり」では、約 12 万人もの来訪者で賑わう。

900 有余年の歴史をもつ備前焼は堅牢な焼き物として西日本各地に流通し、戦国の世には、その「冷え枯れたる」趣により茶事に用いられ、戦国が終わる頃には為政者も重用する焼き物となる。後の逆風時、陶工は細工物に活路を見いだすも、苦難の近代を迎える。高度成長期、新幹線の開通に歩調を合わせるように「備前焼中興の祖」金重陶陽が人間国宝(国指定重要無形文化財「備前焼」保持者)となり、多くの作家が生まれる。

現在では伊勢崎淳氏を含め5人の人間国宝を輩出した「焼き物」の産地として全国、世界にも知られている。また、岡山県でも県指定重要無形文化財保持者「備前焼製作技術」を設け、文化財保護制度の中に位置づけている。

備前焼の製作技術は、大きく分けると「ろくろ」の回転を利用して成形する方法と、ろくろを利用しない方法がある。ろくろ成形には、あらかじめ粘土紐(帯)を積上げて筒状にしたものを成形する方法と粘土塊に水をつけながら壺、徳利、皿など引き上げる「水挽き」などがあり、現在はこの方法が最も多い。ろくろを使わない成形には、手でひねり出して獅子や干支などの置物を成形する方法と石膏型などから抜き出して接合部を成形する技法がある。また、粘土塊を薄く切り取り板状にしたものを組み合わせてつくる技法もある。江戸時代後半に備前焼の主力商品であった細工物は、土型と呼ばれる型を使用して成形する技法が主流で、石膏型が導入されるまで備前焼の主流の製作方法であった。しかし、この土型成形技法は現在では伝承する陶工はおらず、江戸時代から続く窯元に7,000点あまり保管されているのみである。もちろんこれらの技法を組み合わせる作品を成形する場合もある。

近年は石膏型へ粘土を水で溶かし流し込む「^{いこ}鑄込み」という方法を用い、ごく短期で多量に生産する場合もある。焼成手法や窯変などは割愛する。

備前焼の製作技術以外に、無形文化財の指定や選定保存技術の選択はなされていないが、伊里地区にはかつて「竹筆」の製作技術があり、また八木浄慶作のろう石製大日如来座像や三石地区で蠟石製の置物が散見されることから江戸時代から続く蠟石の加工技法が伝承されていた可能性はある。

伝統技術もその地域的特色の有無を視座に再調査の検討を要する。

(5) 民俗 【表2】

備前市は水運、山陽道など交通に恵まれたことから、他地域との交流もあり、裕福な地域であった。備前市は市町村合併前の旧備前市、日生町、吉永町の三つの地域に大きく分けることができるが、地域によって生業が異なるため風習にも違いが生じている。現在でも、言葉や食生活にその様子を見ることができる。

民俗分野の中では、比較的古い姿を留めているものに祭礼が挙げられる。歴史の流れの中で、生業の転換や技術の発展により生活様式はどんどん変化していくが、この影響を受けにくいのが祭礼である。備前市内では春祭りをする地域もあるが、祭りの多くは10月に集中しており、執行の中心役を交代で回す当屋制や神楽舞などが特徴として挙げられる。

祭りの歴史は資料があまり残っておらず紐解くのが困難であるが、日生地域の高良八幡宮の神輿や片上の宇佐八幡宮祭のだんじりの中には、江戸中期製作のものを見つけることができる。また、吉永地域には市指定文化財の「大明神相撲田楽番付」が残っており、正和4(1315)年に春日神社で神事相撲が行われていたことがわかる。現在でも神事の際に相撲が行われ、土俵が残っていることも多い。このように、断片的に祭礼の歴史の長さをうかがい知ることができる。

表2-1 神社で行われている例大祭

	日 時	名 称	地 区	場 所	備 考
備 前 地 域	五月第二土曜	例祭	片上	恵比須宮	冬に会陽も行われていたが現在は神事のみ
	五月第二土・日曜	大祭	片上	宇佐八幡宮	チョイヤサ(太鼓台)・山車 恵比須宮から稚児行列
	九月末～十月頭	大祭	佐山	殿上西神社	神輿・佐山踊り
	九月末～十月頭	男山八幡宮秋季祭典	鶴海	男山八幡宮	
	十月	秋祭り	穂浪	住吉神社	だんじり・子ども神輿・獅子舞
	十月五日	大祭	伊部	木々須神社	九月最終日曜日にお禊祭
	十月十日	大祭	畠田	畠田天満宮	一週間前にお禊祭(二町内で)
	十月第二土・日曜	大祭	三石	福石荒神社	獅子舞
	十月第三土・日曜	大祭	福田	福田天満宮	一週間前にお禊祭
	十月中旬	大祭	畠田	天神宮	
	十月中旬	大祭	福田	天神宮	
	十月中旬	大祭	三石	三石八幡宮	
	十月中旬の土・日曜	例祭	八木山	鏡石神社	
	十月中旬 (二十日前後)	例祭	新庄	八幡宮	神事のみ
	十月中旬	例祭	香登西	石長姫神社	
	十月第三土・日曜	大祭	久々井	宇佐八幡宮	宮座
	十月第三土・日曜	大祭	浦伊部	宇佐八幡宮	子ども神輿
	十月第三土・日曜	大祭	穂浪	荒神社	
	十月二十二日	大祭	香登本	大内神社	
	十月下旬	大祭	友延	天神社	
	十月下旬	大祭	大内	大滝神社	
	十月下旬	大祭	閑谷	福神社	
	十月下旬	大祭	木谷	天神社	
	十月第四土・日曜	大祭	伊部	履掛天神宮	
	十月第四日曜	天津神社秋季例大祭	伊部	天津神社	獅子舞・稚児行列・子ども神輿・相撲
	十月第四日曜	坂根八幡宮秋祭	坂根	坂根八幡宮	
	十月第四日曜	大祭	伊里中	山神社	
	十月二十五日	例祭	閑谷	閑谷神社	
	十月二十六日	例祭	麻宇那	石立神社	
		日 時	名 称	地 区	場 所
日 生 地 域	四月第一土・日曜	金刀比羅宮大祭	日生	金刀比羅宮別格 日生分社	漁業関係者を中心とした祭礼
	四月上旬	妙見神社祭礼	日生	妙見神社	
	五月第四土・日曜	高良八幡宮大祭	日生	高良八幡宮	神輿
	八月下旬	蛭子神社祭礼	日生	蛭子神社	
	八月下旬	大山祇神社祭礼	日生	大山祇神社祭礼	かつては相撲が行われた
	九月上旬	北奥神社祭礼	日生	北奥神社	
	九月中旬	龍神社祭礼	日生	龍神社	神輿(中断中)
	十月中旬	秋例祭	大多府島	春日神社	神事のみ
	十月中旬	秋例祭	頭島	頭島神社	子ども神輿
	十月中旬	秋例祭	鹿久居島	鹿久居神社	神事のみ
	十月中旬	秋例祭	鴻島	鴻島神社	神事のみ
	十月第三土・日曜	春日祭	日生	春日神社	神輿・獅子舞
	十月第三土・日曜	秋例大祭	寒河	寒河八幡宮	子ども神輿・浦安の舞・子ども相撲
	十月下旬	荒神宮例祭	日生	荒神社	

表2-2 神社で行われている例大祭

	日 時	名 称	地 区	場 所	備 考
吉 永 地 域	一月五日	牛神祭り	田倉	田倉牛神神社	
	十月中旬	秋例祭	金谷	金彦神社	子ども神輿
	十月中旬	秋例祭	福満	荒神社	子ども神輿
	十月中旬	秋例祭	南方	天神社	子ども神輿
	十月中旬	秋例祭	岩崎	天神社	子ども神輿
	十月中旬	秋例祭	三股	天神社	子ども神輿
	十月第三土曜	神根神社獅子舞	神根本	神根神社	獅子舞 (播州金内八保神社より伝播)
	十月第三日曜	春日神社秋大祭	吉永中	春日神社	獅子舞(中断中・播州有年大避 神社より伝播)
	十月	秋祭り	三国	日吉神社	頭屋交代・獅子舞 (播州舟坂より伝播)

一方で備前市内の祭りには、明治以降に新しい要素を取り入れたものも多いことが予想できる。というのも岡山藩主池田光政の時代に儉約令が出され、神輿やだんじりを用いての祭り、盆踊りなどが禁止されたのである。このため、江戸時代を通して藩内では盆踊りが発展せず、祭礼も他地域に比べて質素であった。現に備前市内でも、明治となつてから、だんじりを製作したという神社も確認できる。また、岡山県無形民俗文化財指定の福石荒神社神楽獅子舞や神根神社獅子舞も、明治に赤穂から新曲目を取り入れたと伝承されており、明治の頃の祭礼に大きな変化が起こったと考えられる。備前市内の祭礼の変化について、特に明治以前とそれ以降については、これからの調査課題である。

このように、変化しつつも祭礼が地域に受け継がれているのに対し、盆などの年中行事は姿を消しつつある。『和気郡誌』『吉永町史』『岡山県史』『日生諸島の民俗』などを見ると、海辺や河原で火を焚く「まんど」等と呼ばれる盆行事が備前市一帯で行われていたようであるが、現在では浦伊部などで見られる程度である。備前焼まつりの際に行われる「かべりだいまつ」も元々は盆行事で内容も異なっていたが、そのことを知る人も少ない。また、農業や漁業に欠かせない行事は一年間を通して数多くあったが、これも科学技術の向上によって信仰に頼る必要のなくなった現代では行われなくなった。害虫除けのために吉永で行われていた「虫送り」は昭和30年代に消え、牛馬が田畑に出ることが無くなったため、牛神信仰も衰退している。これらの失われつつある行事を記録に残しておくことが急務である。

民俗の活用についてであるが、同じ市内でありながら、他地域の文化を知らないという市民は多い。地域交流活性化への起爆剤として民俗分野は注目を集めており、備前市でも高齢者と子どもの交流、他地域との交流に用いることができる。

また、近年の民俗芸能ブーム等に乗じ、祭りを観光資源として活用することも可能である。

(6) 芸能・文化など

文学、音楽、芸能、政治・経済・指導者、研究者、スポーツなどの分野で、主に近代以降に活躍した備前市出身の人物や備前市にゆかりのある主要な人物の主な人を列挙

する。なお()内は出身地、出身校、活躍分野などを記載している。

①詩人・歌人・俳人・作曲家

萩原玉芝(寒河 俳人) 美木行雄(穂浪 歌人) 三木露風(詩人 閑谷学校出身)

②音楽

岡 千秋(鴻島 作曲家) 樫本大進(ヴァイオリニスト) 友光雅司(ピアニスト)

③文学者

正宗白鳥(穂浪 小説家) 正宗敦夫(穂浪 国文学者) 藤原審爾(片上 直木賞作家) 柴田錬三郎(鶴海 直木賞作家) 里村欣三(寒河 プロレタリア文学者) 小手鞠るい(伊部 小説家) 眉村 卓(日生 SF 作家) 清水紫琴(片上 小説家) 近松秋江(小説家 閑谷学校出身) 牧野大誓(日生 児童文学者)

④囲碁・将棋

南 善己(日生 囲碁棋士) 有吉道夫(伊里 将棋棋士)

⑤絵画・写真・現代アート

正宗得三郎(穂浪 洋画家) 守時喜三郎(片上 芸術写真) 久保田耕民(日生 日本画家) 林 三従(片上 現代アート)

⑥政治・経済・指導者

加藤忍九郎(三石 耐火煉瓦産業の基礎)
明石照男(岩崎 帝銀会長 経団連顧問)
小長啓一(新庄 アラビア石油社長 経団連顧問)
建内保興(三股 日本石油会長)
玉野知義(片上町長 片上鉄道・港の整備 代議士)
西 毅一(再興閑谷学校校長 衆議院議員)
宇野圓三郎(福田 治山事業の指導者)
大鳥圭介(閑谷学校 歩兵指図役頭取 明治維新後枢密顧問官)
布施 健(香登本 検事総長)
三村久吾(多麻 岡山県議会議長 生家を移築：八塔寺国際交流ヴィラ)
中司通明(日生 産業振興 閑谷学校の危機を救済)
山田方谷(閑谷学校再興 藩政改革者 備中聖人)
森下精一(日生 世界的に漁網製造販売 BIZEN 中南米美術館の礎)
有吉京吉(日生 大洋漁業の発展に尽力)

⑦研究者

桂又三郎(伊部 備前焼研究の大家)
黒田幹一(鶴海 中国古代貨幣の研究 考古学者 鶴山村長)
時実利彦(香登西 大脳生理学の世界的権威 東大医学部教授)
星尾正一(日生 キリシタン遺跡研究者)
間壁忠彦(考古学者 備前焼研究者)
目賀道明(備前焼研究者)

⑧スポーツ

谷 三三五(木谷 1924年パリオリンピック 短距離走者)
牧 真一(1952年ヘルシンキオリンピック フェンシング)
山口隆弘(木谷 1956年メルボルンオリンピック 重量挙げ)
重友梨佐(香登本 2012年ロンドンオリンピック 女子マラソン)

2 備前市の歴史と地域文化資源の特性

この項目では備前市の歴史と地域文化資源の特性をまとめる。すでに「遺跡・史跡」、「植生・景勝地・天然記念物等」、「建造物など」、「伝統技術」、「民俗」、「芸能・文化など」の項目で詳述しているが、次に主な特徴をまとめる。

(1) 山や川、海、平野などの地勢から交通・流通の拠点となった地域

備前市は岡山県の南東に位置し兵庫県と隣接する。その地勢から岡山県東部の生産・活動の拠点ともいえる地域として発展してきた。内陸に入り込む片上湾は天然の良港であり、その最奥部は縄文時代に人々が定住し長縄手遺跡が形成され、古代には美作国の津となる。15世紀中頃の文献『兵庫北関入船納帳』では、「片上・伊部」などから備前焼が積み出されていたことがうかがえる。日生の島嶼部には流通の拠点と考えられる千軒遺跡ができる。一方、低丘陵が展開する岡山県南だが、備前市では標高が500mを超える熊山をはじめ急峻な山塊が連なる。その熊山には中世には宗教的な拠点ができ、山々には戦国武将が跳梁跋扈する三石城や富田松山城などが構築される。平野部に急峻な山塊を縫うよう作られた山陽道は、鎌倉時代の終わり頃、三石～和気を通る北路から三石～片上～長船の南路に変わり、香登の平野部を通る。「一遍上人絵伝」にも「福岡」の市の賑わいが描かれている。近世の山陽道沿いには醸造業やお歯黒生産で栄えた香登がある。近代以降では、柵原の硫化鉄鉱石の積出ルート片上鉄道と片上港が流通の拠点となる。

(2) 窯業を礎に発展してきた産業構造をもつ地域

伊部の地で生産を始めた備前焼は、中世後半以降機能性の高い商品として西日本を中心に流通し、織豊期、その味わいから為政者に茶道具として取り上げられた。近世以降は他の窯業地で生産された施釉陶や磁器に商品としての市場を奪われ、細工物や土管、徳利など特定の商品のみ活路を見いだすが、明治期には衰退の路をたどる。昭和に現れた備前焼中興の祖と呼ばれる金重陶陽によって、美術品としてその市場価値を見いだされ、今日に至る。現在、窯元・備前焼作家は全国で400人を超えるという。一方、土管などの生産技術は、三石地区でのろう石開発と相まって、備前地域の耐火煉瓦産業へと発展し、現代でも備前市の基幹産業となっている。

(3) 恵まれた自然から生み出される産物を生かした食文化が育まれた地域

備前市は市域面積の2/3以上も山地が占めることから自然に恵まれた地域である。また瀬戸内海に面していることから海の幸に恵まれている。その恵まれた自然から生

み出される産物を生かした食文化が育まれた地域でもある。その代表格は言うまでもなく「カキオコ(カキ入りお好み焼き)」である。昭和 36 年にカキ養殖が日生地域で始まったことがきっかけのようだが、今では日生地域のソウルフードとして全国に向けて強力な情報発信力を持っている。このほかにもサワラ、ケツケ(ダイチョウ)、イイダコ(チンメイダコ)、このわた、アナゴなどの海の幸、イチジク、ピオーネ、ソバなどの山の幸にも恵まれている。最近では備前焼にスイーツやカレーを組合せたり、地域の伝統料理を子どもたちとつくる「神根ねこめし」など新たな取組みもされている。

(4) 多数の文化人を輩出し、また現代でもそれが進行している地域

備前市出身の文学者は、自然主義文学に新境地を開拓した穂浪出身の正宗白鳥、エンターテイメント作家としても活躍し、直木賞も受賞した片上ゆかりの藤原審爾、「眠狂四郎」シリーズでも知られ文化人タレントとしても活躍した鶴海出身の柴田錬三郎が代表格である。さらに近年再評価が進むプロレタリア文学者の寒河出身の里村欣三、伊部出身の小説家・詩人で「エンキョリレンアイ」などの恋愛小説が話題を呼んだ小手鞠るいも挙げられる。このほか芸能、政治・経済、音楽の分野でも世界的に活躍し、地域に貢献した多くの方々がいるが、備前市出身の文学者数は他の分野に比べて顕著である。また小津安二郎監督「早春」の映画のロケ地として三石が舞台となったのをはじめに、八塔寺ふるさと村などが映画のロケ地として定着していることも特色として挙げられる。

(5) 江戸時代に特色のある人材育成のための学校が置かれ、現在まで守り続けられている地域

前項で既に記載したとおりであるが、「閑谷学校」は備前市の成り立ちを考えると一番の特色として挙げられる。国宝の講堂をはじめ多くの建物が 340 余年丁寧に保存管理され、四季折々に変化する周辺の環境と相まって岡山県が誇る観光スポットとなっている。閑谷学校は現代でも世界遺産登録推進運動や新総合計画の理念の中に取り上げられるなど「備前市の個性」として重要である。

第4章 関連文化財群の設定

指定された文化財という言葉は、「人々の生活からかけ離れたところで、時間空間に関係なく単体で存在し、価値のあるもの」という印象でとらえられることが多い。しかし、文化財は人々の生活や時間の流れと不可分の関係で存在し、地域の個性を表出する特質も含んでいる。この章では第3章で概観した備前市の「地域文化資源」を「備前市の歴史・文化を特徴づける文化財の関連性によって生み出される一定のまとまり」つまり「関連文化財群」として再構成する。これは従来の指定文化財等のフレームを活用する部分もあるが、これだけにとらわれることなく「現在、過去、未来」など時間軸の視点、「娯楽文化」の視点など多方向から考えていくためである。

地域には長い時間をかけて培われた文化の蓄積があり、その全てがかけがえのないものである。ここでは地域の文化財をある特定の文化財群として設定するが、そのことによって他のものが切り捨てられるようなことがあってはならない。

1 学びの原郷閑谷学校と岡山藩主池田家の遺産 【図1】

閑谷学校は備前市の成り立ってきた歴史的な背景を考えると一番に挙げられるものである。寛文10(1670)年、池田光政が木谷村に学校をつくるよう津田永忠に命じたことによってその歴史が始まる。学房や飲室の建物の建設から340余年、国宝の講堂をはじめほとんどの建物が国指定重要文化財になり国の特別史跡として、丁寧に保存管理がなされている。楷の木の紅葉、観梅など四季折々に変化する自然と講堂の備前焼瓦の美しさに惹かれ、今では年間十数万人が来訪する岡山県内でも有数の観光スポットである。現在では、「旧閑谷学校を世界遺産に登録しよう」という取組みや、平成25年度策定された新総合計画にも「目指すべき市の姿の象徴」として理念にも掲げられる。

また、閑谷学校といえば、学校のある周辺のみを思い浮かべる人が多いが、成立の過程でできた施設や関わった人々が残したものが備前市内に点在している。この項目では、「学びの原郷閑谷学校と岡山藩主池田家の遺産」という関連文化財群としてまとめる。

まず、現在の講堂の瓦を焼成するために閑谷学校から南約3km、福神社付近の山裾に貞享3(1686)年閑谷焼窯が2基築かれた。5万枚もの瓦焼成後は、宝永7(1710)年頃まで、閑谷学校の祭器や細工物など製造する藩の窯業試験場的な場であったという。現在は県の史跡として保護されている。

JR 赤穂線伊里駅のホームに降り立つと、東備港に向けて広大な水田地帯が広がる。休耕田や点在する住宅はみられるが、規則的な区画が展開する。池田光政が津田永忠に命じて中国周時代の税法を具現化するために広大な土地を開発して上井田、下井田などを作った。実際の完成は、光政没後の綱政の時代になる。もちろん閑谷学校周辺には、光政の理想の具現化を試みた「井田」とは別に、閑谷学校の経営基盤を支える「約280石の学田」、「70町余の学林」がある。

次に閑谷学校を作り上げた津田永忠が関わった資産をみていく。

元禄11(1698)年、「大多府に港を整備せよ」との藩命により津田永忠は延長約130m、

幅6m、高さ5mの石積みの防波堤を大多府島に作った。その形は、閑谷学校の石堀と見まごうばかりで、わが国で現存する数少ない明治以前の防波堤の中で最も優れた構造物のひとつであるという評価がされている。現在では、大多府島の玄関口に国登録文化財「大多府漁港元禄防波堤」として、他にはない優れた景観を作り出している。合わせて航行の安全を図るため「灯籠堂」や船舶の飲料水確保のため「大井戸」も整備され、現在では市指定史跡として保存が図られている。

寛文7(1667)年、池田家の菩提寺、京都花園妙心寺護国院の炎上をきっかけとして光政が津田永忠に命じて作ったのが和意谷の池田家墓所である。京都から海路運ばれた池田輝政・利隆らの遺骸は片上の津から鏡石神社に運ばれ仮安置されたと伝わる。鏡石神社のご神体はろう石でできた八木浄慶作「池田輝政」の像で、本殿は三間社流造で、平唐門が付属する。墓所は、標高390m、和意谷敦土山山上に光政の祖父輝政(姫路城城主)、父利隆、光政らを儒式で埋葬している。明治年間に慶政、茂政の「お山」ができ、合計7つのお山で構成されている。

【主な地域文化資源】

- ・ 国宝旧閑谷学校講堂をはじめ国指定建造物群からなる学びの原郷閑谷学校
- ・ 講堂の瓦を焼いた県史跡閑谷焼窯跡
- ・ 池田輝政らの遺骨などが仮安置された鏡石神社
- ・ 中国周代の制度を具現化したといわれる井田跡
- ・ 岡山藩主池田家墓所(和意谷墓所)
- ・ 津田永忠によって開発された大多府漁港元禄防波堤
- ・ 京都から池田輝政らの遺骸を陸へ揚げた片上港
- ・ 明治6(1873)年閑谷学校の再興をした山田方谷のために建てられた庵跡
- ・ 文化10(1813)年に閑谷学校教授役となった武元君立の宅跡
- ・ 明治17(1884)年に再興された閑谷巒の巒長西薇山の墓所をはじめ、江戸時代からの閑谷学校関係者が葬られた墓所
- ・ 光政の補佐役として岡山藩の藩政確立に取り組んだ熊澤蕃山隠棲の地蕃山に残る宅跡

2 備前焼を生み、栄えるまち 【図2】

平安時代の末、西の山窯跡や大ヶ池南窯跡など伊部の山麓で生産が開始された備前焼は、鎌倉時代中頃になると山の中腹に立地することが多くなり、南北朝期にはさらに高度をあげ、標高400mを超えるような熊山山塊に位置するものもある。熊山山頂には熊山遺跡を代表とする石積み遺構が点在し、平安時代には霊山寺という山上寺院が建立される。南北朝末ないしは室町時代はじめ頃、ふたたび窯は山麓に築かれるようになる。規模も山崎古窯跡の幅2.5m、推定全長20m、不老山東口窯跡の幅3.4m、推定全長40mにも巨大化し、量産化を指向する。その後16世紀後半のある段階で、山麓に点在していた大窯は北大窯、西大窯、南大窯へ集約されることになる。

律令制下の備前地域は、当初邑久郡香登郷、方上郷などに属していたようで、その後

天平神護 2 (766) 年、藤野郡(のちの和氣郡)に編入されている。現在の備前地域は『倭名類聚抄』では和氣郡坂長郷、香止郷であるが、記載のない「方上郷」は「延喜式」では美作の港「片上津」となっている。「香止郷」は伊部を含む香登の平野部だったと想定されるが、白河天皇の勅旨田となり、その後堀河天皇の時代(白河院の院政期)に荘園として成立する。その後、香登荘は鳥羽院、八条院に伝えられるが、母の美福門院藤原得子の菩提を弔うために高野山菩提心院に領家職が寄進される。こうして香登荘は八条院を本家とし、菩提心院を領家とすることになる。

菩提心院は、高野山内で金剛峰寺方と対立していた大伝法院方の末寺に属する。その紛争の結果、正応元(1288)年大伝法院は、和歌山県那賀郡根来町へ移る。この地にある根来寺はその大伝法院を前身とする新義真言宗の総本山であるが、その坊院跡から埋藏遺構として大量の備前焼の大甕が出土したことで知られる。その数は根来寺全山で、1,500 個以上といわれており、その多くが 16 世紀後半に属するものである。用途は甕倉で油を蓄える容器としての使用が推定されている。その量的なものを香登荘と大伝法院との関係に見る向きもあるが、香登荘は南北朝の動乱によって領有は仁和寺に帰し、最終的に室町幕府領として伝領されていったと考えられている。したがって大量出土の理由を別に考える必要がある。

室町時代、備前の地は赤松氏、山名氏、浦上氏など勢力がめまぐるしく入れ替わるが、最終的に宇喜多氏が覇権をにぎる。そのころ活躍した豪商で来住法悦という人物は、片上湾の最奥部浦伊部に居住し、瀬戸内海の交易で何万石もの富を築いたという。交友関係も日禪をはじめとする日蓮宗本山関係者、保津川を開削したことで知られる京都の大商人角倉了以との結びつきがある。天正 18(1590)年には、岡山城築城の銀を調達した功績により、岡山城下に一町を賜り、屋敷を構えるなど宇喜多氏とも非常に強く結びついている。

浦伊部の地は伊部南大窯跡からわずか 1.5km 東にあたり、備前焼を海上ルートで積み出す際、要地となったところで、根来寺での大量の備前焼大甕出土の背景には豪商来住法悦を要とした海上交易ルートのかかわりが深いと考えられる。平成 12 年の調査で確認され天正期の窯と推定されている東 3 号窯跡はまさに根来寺に大甕を大量に提供した窯のひとつであった。

文献資料・考古資料に「香登」がやきものの産地として登場することもある。和歌山県西牟婁郡白浜町長壽寺境内から出土した大甕は「備前國住人 香登御庄□ 二 曆應五年□ あつらう也」の銘文があり、「曆應 5 (1342)」年の年号は知見のある年銘資料としては最古のものである。

応安 4 (1371) 年、九州探題へ下向する途中の今川了俊(貞世)は、「さて、かゞつ(香登)といふさとは、家ごとに玉だれのこがめといふ物を作ところなりけり(中略)其日はふく岡につきぬ・・・」という記述を『道ゆきふり』という紀行文の中に残している。

その福岡については、正安元(1299)年円伊を主宰とする工房で制作された『一遍聖絵』の福岡の市の場面に、布や魚鳥など商いの商品とともに簡単な掘建て小屋の下に備前焼が転がっている様子が描かれている。一遍がこの地を布教に訪れたのは、弘安元(1278)

年頃だったといわれている。

このほか「香登荘」の関係ではないが『兵庫北関入船納帳』に文安2(1445)年に備前焼の壺や甕が1,200個余り兵庫港(現神戸港)に運ばれた記載がある。

このように過去の備前焼は機能性の高い商品として西日本を中心に流通し、織豊期、その味わいから為政者に茶道具として取上げられた。近世以降は他の窯業地で生産された施釉陶や磁器に商品として市場をうばわれ衰退の道をたどるが、昭和に現れた備前焼中興の祖と呼ばれる金重陶陽によって、美術品としてその市場価値を見出して、今日にいたる。現在、窯元・備前焼作家は400人を超えるという。

【主な地域文化資源】

- ・国指定史跡「備前陶器窯跡」をはじめ市指定史跡「備前熊山古窯跡群」「下山龍王山古窯跡群」、市指定建造物「天保窯」など備前焼を生産した遺跡群
- ・窯元、作家が軒を連ね、登窯の煙突が独特の景観をみせる伊部の街並
- ・近世の山陽道の面影を残す伊部の東西通りと点在する備前焼を使った塀や土留め
- ・医王山、不老山、樞原山など古窯が点在する山々に囲まれた伊部
- ・昭和43年岡山県の行政発掘の第1号が行われた不老山東口・西口窯と大ヶ池を縦断する山陽新幹線の高架
- ・陶祖を祀る忌部神社がある宮山からの眺望と備前焼の屋根瓦、参道などがある天津神社
- ・備前焼作家の檀家が多い長法寺、周辺に広がる池と植生
- ・窯業を母体として成立した耐火煉瓦工業の近代化遺産群と煙突群
- ・備前焼の積出拠点とされる浦伊部の来住家と市指定史跡「伝太閤門跡」、妙圀寺

3 近代漁業発祥のまちと食文化 【図3】

日生では「R」のつく月にはカキが食べられるシーズンだという。英語で9月から4月を表記すると必ず「R」が入ることかららしい。このカキ、今ではご当地グルメ「カキオコ(カキ入りお好み焼き)」として全国的に知られ、全国から観光客が押し寄せるほど盛況になっている。このブームは、10年ほど前に「日生カキお好み焼き研究会」という団体が、地元で食されていた「カキオコ」を見直そうと広報をはじめたことが端緒となっている。日生で採れる新鮮で肉厚なカキを千切りキャベツと生地とを合わせて鉄板で焼くためカキの独特の風味を失わない所が魅力である。そのため新鮮なカキが市場に出回る10月下旬から3月頃までの季節限定メニューになっている。

ルーツははっきりしないらしいが、昭和36年にカキ養殖が始まったことがきっかけになっているようである。現在ではカキの生産は広島県、宮城県に続き全国第三位で、日生は県内でも有数の産地である。

全国でもカキ養殖の有数の産地となった日生であるが、江戸時代の終わりごろにはサワラ漁の流瀬船が300隻、阿波、讃岐、播磨まで出漁し、大阪魚市場では「魚島のサワラ」として高値で取引された。また日生の漁民が150年前に生み出した「つぼ網漁法」

が日本の近代漁法に影響を及ぼしたこともその歴史のひとつである。つぼ網漁法は魚がものにぶつくと曲がる習性を利用したもので、チヌ、カレイ、メバル、車エビ、イカ類を対象としている。10m×100mの範囲で竹竿を海中にさし、それに網を袋状にかけ、道網と呼ばれる誘導部分から魚を網の中に導くシンプルで合理的な漁法として知られる。進取の気性に満ちていた日生の漁民は、明治20(1887)年以降の韓国、フィリピン、シンガポールなど海外へも進出し、その漁法が伝播したともいわれている。その後、日生地域では造船業、製網業へと展開していくが、耐火煉瓦工業にともなって海運業も主要な産業となる。現在では漁業による歴史的な縁により韓国・蔚山^{ウルサン}広域市東区文化院との文化交流協定を締結している。

日生漁港の五味の市に隣接して、江戸時代の建物を移築改修した加子浦歴史文化館がある。建物内には漁具や回船などの資料が多数展示しており、このような日生地域のルーツを学習する絶好のポイントとなっている。

五味の市では、朝早く水揚げされた魚が漁師のおかみさんによって威勢良く売られている。関西方面からのお客さんが多い。さまざまな魚、競り出せない魚を扱うことが市の名前の由来らしいが、以前は現在地より北700mにあり、平成になって岡山県によって埋立て整備された「東備港日生地区」に移転した。

日生港の最深部にあたるこの付近は高い建物が港に隣接し、店先では焼き穴子など海産物が販売されている。日生諸島への定期便が発着する船着き場、係留された漁船群、高良八幡の社叢と楯越山、高層マンションなどが、港湾の中に競うように独特の対比で特徴的な景観を成している。

船着き場から大生汽船の定期便で沖合に出ると、向かって左側に「うちわだの瀬戸」で架橋工事が進む鹿久居島が広がる。岡山県最大の島で10.17km²の広さがあり、頭島大橋からペンション、民宿が多い頭島へとつながる。さらに左手前方沖合には、キリシタン巡礼の地として知られる鶴島、風雨の避難港として古くから栄えた大多府島の島影が望める。右側は「うずあいの瀬戸」を挟んで曾島、点在する別荘の白い建物と島影が印象的な鴻島がある。港に戻り日生地区の住宅地に入り込むと鮮魚店や小売店、カキオコの店や水餃子の有名店が住宅に隣接し、さらに歩みを進めると、江戸時代中期に活躍した廻船業者田淵屋甚九郎の碑がある西念寺や獅子舞が市指定無形民俗文化財になっている春日神社がある。

【主な地域文化資源】

- ・大生汽船船着き場、係留された漁船群と湾岸部にぎっしり集まった三階建ての建物群
- ・厳冬期に開催される消防団放水演習(源平放水合戦)
- ・8月13日に日生港で開催されるひなせみなとまつり花火大会
- ・2月下旬に開催されるひなせかき祭のにぎわい
- ・五味の市と日生港
- ・日生諸島の島影と架橋
- ・早くから開けた大多府島の歴史を示す史跡と自然研究路

・かき筏と島々

・五味の市で販売されている新鮮な海産物

【備前の海の幸】カキ サワラ ケッケ(ダイチョウ) イイダコ(チンメイダコ)

このわた アナゴ など

【備前の山の幸】ミカン イチヂク(トウガキ) ピオーネ そば など

4 中世山岳仏教の栄華とふるさと村の景観 【図4】

八塔寺ふるさと村の中心部に立つと、まさにそこは「スローライフ」。普段間断なく音にさらされている現代人にとって、農村風景を背景に蝉の声、たまに走る車のエンジン音など、一つ一つの音がクリアに聞こえる。いわば、「音に隙間がある静けさ」が日常と離れた独特の空間である。

このふるさと村の景観ができたのは、昭和 49(1974)年である。国による面的な保存整備事業が行われていない時期に岡山県によって独自に進められた保存・整備事業で、津山市の大高下、鏡野町の越畑とともに「ふるさと村」整備の端緒となった。現在では「のどかな農村風景」が広がる地域ではあるが、その名前が示す通り「八塔寺」としての積み重ねがある。

八塔寺は、神亀 5 (728)年聖武天皇の勅願によって弓削の道鏡が創建したと伝わっている。中世には、高野聖の分流「八塔寺聖」の力でできた真言密教寺院として勢力があり、「西の高野山」とも呼ばれ一時は「八院六十四坊七十二ヶ寺」あったといわれている。この行者関連の史跡に市指定史跡「石小(子)詰の塚」がある。

乾元元(1302)年、歴応元(1338)年、八塔寺は備前播磨美作の国境に位置するという地形的な要因から再三の兵火に遭い焼失している。その後永正 14(1517)年、三石城主浦上村宗と置塩城主赤松義村の戦い八塔寺合戦で全山が焼失した。しかし高頭寺の山門は唯一焼失しなかったと伝わる。

この高頭寺であるが、その寺号は江戸時代初め頃にさかのぼる。元和元(1615)年、八塔寺は常照院(愛染院)、宝寿院(真言院)、明王院の三院になる。常照院に天台宗の僧が入り、八塔寺の寺号を使用、天台宗への改宗を行う。宝寿院と明王院は真言宗のまま高頭寺(山号恵日山)と改め、現在に至る。

池田忠雄による再興がなされたのは寛永 3 (1626)年であるが、その後も宝永 3 (1706)年池田綱政により三重塔などが整備された。しかし、寛政 2 (1790)年、またも焼失に会い、その後再建されて現在に至る。

景観という視点では、中世にはかなりの規模を有する宗教的な拠点であり、その名残は八塔寺周辺にうかがうことができる。しかし現代の景観の主をなすのは「ふるさと村整備」事業によるもので、「黒い雨」をはじめ映画のロケ地として取り上げられている。

またモリアオガエルやヒメボタルなどが生息する周辺の豊かな自然環境も景観の特徴として忘れることができない。

このほか備前市内には熊山を中心に帝釈山霊山寺(一部が備前市)という山上伽藍の跡や室町期には三十三坊あったという古刹大滝山福生寺や、報恩大師が開基し盛時には

7堂13坊あったといわれる吉永地域の満願寺跡、中世盛時には13ヶ寺を数えたという日生地域の寺山地区もある。

【主な地域文化資源】

- ・市指定史跡「山上伽藍八塔寺の旧跡」「山上伽藍八塔寺の三重塔跡」、市指定工芸品「銅鐘」などを含む八塔寺、高頭寺周辺の景観
- ・中世山岳仏教の栄華を偲ばせる市指定石造美術「石小(子)詰の塚」、日吉神社などを含む森
- ・典型的な農家の造りをもつ国際交流ヴィラ、民俗資料館などの建物群と田のおりなす空間
- ・後鳥羽上皇配流の道沿いに建つ皇屋敷跡の碑
- ・市指定天然記念物「ヒメボタル(多麻地区)」、「コウヤミズキ自生地(高田地区)」、「モリアオガエル(加賀美・多麻地区)」など自然豊かなふるさと村周辺の環境
- ・山々の緑に映える元三国郵便局の局舎
- ・かつて宗教拠点があった熊山や満願寺や寺山

5 耐火煉瓦産業で日本の近代化を支えたまち 【図5】

明治34(1901)年に官営の八幡製鉄所が粗鋼の生産を開始したことにより、鉄鉱石を溶かす本格的な製鉄業が発展していった。そのような中で、溶鉱炉の内壁に使用する耐火煉瓦の需要が増加したこと、備前焼の窯の技術を持つ地域があったこと、大平鉱山のろう石開発が行われていたことなどから、加藤忍九郎の三石耐火煉瓦株式会社が発展し、三石地区に耐火レンガ工場が集中することとなる。

また兵庫県境の三石地区を通るJR山陽本線には、四連の三石金剛川拱渠、小屋谷川拱渠をはじめ計10基もの煉瓦拱渠群(アーチ橋)が連続している区間がある。明治9(1876)年に造られた京都府の七反田拱渠の六連に次いで径数が多い。また岡山県近代化遺産総合調査報告では、野道拱渠はポータルに焼過煉瓦を用いた模様(ポリクロミー)が美しいだけでなく、堅積されたヴォールトに明確な縞模様が入るといった珍しいデザインであることや、小屋谷川拱渠は内部に勾配が付いており、途中で何段にも高さを変えている点が珍しいとの指摘がなされている。

JRの煉瓦拱渠群(アーチ橋)以外にも、三石地区にはMプロジェクトの象徴的存在となっている昭和12(1937)年に完成した三石小学校講堂、入り口に独特のアーチを持つ木造三階建ての深井鉄工所、三石耐火煉瓦株式会社の煙突など、耐火煉瓦産業で日本の近代化を支えたまち「三石」を特徴づけている。

吉永町南周辺には工場に隣接して「校倉造り」風の大型の建物をみることがある。風を中にいれ、製品であるクレーを乾燥させるための施設である。その工場のひとつ山陽クレー工業株式会社のホームページによると「クレーは元来粘土、または白土と訳されるが、日本では主としてろう石を微粉末にしたものをさす。ゴム業界ではクレーのことをカタルポといい、薬品業界ではカオリン、製紙業界では白土と呼び、業界によって異なる。タルクは中国から原石を輸入し粉碎精錬した鉱物の粉末で、用途は製紙の填料、

農薬のキャリアー、塗料接着剤、ゴム、樹脂、紡績、医薬等幅広い分野にわたって利用されている。商品本来の機能を十分に発揮させるために潤滑油的役割をもつ原料（一部改変）との説明がある。このクレー、戦後の復興期には全国の9割を占める主要な産業のひとつであり、現在でも製品を乾燥させる施設は独特の景観をつくりだしている。

【主な地域文化資源】

- ・三石耐火煉瓦株式会社の煙突と街並
- ・昭和12年建築の三石小学校講堂
- ・三石金剛川拱渠をはじめとした旧山陽鉄道（現山陽本線）のアーチ
- ・深井鉄工所、三石耐火煉瓦株式会社事務棟へ続く建物群
- ・木野山神社からの山陽本線の鉄路
- ・三石の街並を取り巻く台山と城山
- ・吉永のクレー工業
- ・片上の耐火煉瓦産業

6 映画と文学、「心象風景」の残るふるさと 【図6】

6番目に設定した関連文化財群は、文化財のフレームからではなく、備前市で映画・テレビドラマのロケ地となった場所、備前市出身またはゆかりのある文学者とその作品に登場する舞台という大きく二つの視点から構成してみた。

まず映画・テレビドラマのロケ地となった場所であるが、昭和31(1956)年公開の原節子主演、小津安二郎監督の「早春」を嚆矢に平成21(2009)年公開の広末涼子、中谷美紀主演の映画「ゼロの焦点」まで10例を数える。岡山県内では倉敷市の美観地区、岡山市の西大寺地区、高梁市の中心部の街並などがロケ地としてよく知られているが、備前市内でも比較的ロケが多く行われている。市内地区別では三石地区と八塔寺ふるさと村の2ヵ所が多い。これは三石地区や八塔寺ふるさと村がひとつの関連文化財群として構成できるほど特徴的な景観をもつところに起因すると思われる。

次に備前市出身またはゆかりのある文学者を取り上げてみた。明治末から昭和初期に活躍した穂浪出身の正宗白鳥、「眠狂四郎」シリーズで知られる鶴海出身の直木賞作家柴田錬三郎、純文学からハードボイルド、恋愛小説まで幅広い執筆で「小説の名人」とも称された片上出身の直木賞作家藤原審爾、プロレタリア文学者として再評価が進む寒河川出身の里村欣三、「エンキョリレンアイ」などの恋愛小説が話題を呼ぶ伊部出身の小手鞠るいがあげられる。出身者ではないが、会社員として日生に在住していた眉村卓はSF作家で、平成21(2009)年、癌で亡くなった妻に日々・ショートショートの作品を捧げた実話をもとにした「僕と妻の1778の物語」が竹内結子、草彥剛主演で映画化されている。

漫画では、原作ディスク・ふらい、作画西崎泰正による「ハルカの陶」が平成23(2011)年話題となった。原画作者は岡山市出身だが、備前焼に魅せられ窯元で修業するハルカを伊部の街並みを背景にさわやかに描き、陶芸の世界に新しい風を吹き込んだ。

以上、端的に言えば「エンターテインメントと備前」という関連文化財群であるが、映画、文学、漫画などは現代人の生活を潤す重要なアイテムでもある。それを生み出す「人」が片上湾から日生湾にかけて多く輩出し、生み出す「場所」が「三石地区」「八塔寺ふるさと村」「伊部地区」に多い。

【主な地域文化資源】

◎映画のロケ地

- ・原節子主演、小津安二郎監督の映画「早春（'56）」で舞台となった三石
- ・広末涼子、中谷美紀主演の映画「ゼロの焦点（'09）」と三石耐火煉瓦工場
- ・川谷拓三出演の公害をテーマにした映画「煤煙よ、さようなら（'60）」と片上の街並
- ・滝田洋二郎監督の映画「バッテリー（'07）」と備前市総合運動公園野球場
- ・稲垣吾郎主演のテレビドラマ「八つ墓村（'04）」と八塔寺ふるさと村
- ・田中好子主演今村昌平監督の「黒い雨（'89）」と八塔寺ふるさと村
- ・豊川悦司主演市川崑監督の「八つ墓村（'96）」と八塔寺ふるさと村
- ・松嶋菜々子主演のテレビドラマ「火垂るの墓（'05）」と八塔寺ふるさと村

◎備前ゆかりの文学者と作品に登場する場所

- ・正宗白鳥と穂浪
明治から昭和初期に活躍した小説家、劇作家。自然主義文学に新境地を開拓し文化勲章も受けている。代表作は日露戦争後の青年像を描いた「何処へ」。弟の正宗敦夫は国文学者として著名。
- ・藤原審爾と片上
代表作「秋津温泉」で知られる片上ゆかりの直木賞作家。「泥だらけの純情」「新宿警察」などエンターテインメントの作家としても活躍。女優藤真利子は娘。
- ・柴田錬三郎と鶴海
鶴海出身。「眠狂四郎」シリーズで知られる直木賞作家。文化人タレントとしてテレビでも活躍する一方、弟子の中から多くの作家を輩出した。
- ・里村欣三と寒河
寒河出身のプロレタリア文学者として近年再評価されている。代表作は「苦力頭の表情」「シベリヤに近く」など。
- ・小手鞠るいと伊部
伊部出身の小説家、詩人。「エンキョリレンアイ」など恋愛小説が話題を呼ぶ。
- ・眉村卓と日生
1958年に大阪窯業耐火煉瓦株式会社(現：株式会社ヨータイ)日生工場に勤務。1年余の勤務だったが、大阪へ帰郷後も日生を故郷のように何度も訪れている。「ねらわれた学園」「なぞの転校生」など著名。近年は癌で亡くなった妻に日々・ショートショートの作品を捧げた実話をもとにした「僕と妻の1778の物語（'09）」が映画化。竹内結子、草彅剛主演。

漫画

- ・原作ディスク・ふらい、作画西崎泰正による漫画「ハルカの陶^{すえ}」と伊部の街並
- ・西村京太郎「赤穂バイパス線の死角」
- ・井伏鱒二「七つの街道」

7 交流と流通の要^{かなめ}となった地 【図7】

縄文時代、片上に人々が定住した集落跡「長縄手遺跡」、古墳時代には30数面もの鏡が出土した国指定史跡「丸山古墳」、古代には美作国の津であった片上、中世では靈山寺を要に宗教的拠点^{かなめ}を形成した熊山、鹿久居島に展開した千軒遺跡、戦国武将が跳梁跋扈した三石城や富田松山城、近世山陽道沿いの醸造業やお歯黒生産で栄えた香登、柵原の硫化鉄鉱石の積み出しルート「片上鉄道」と片上港など、交通・流通の要^{かなめ}となった地の概要をまとめる。

①原始

- ・長縄手遺跡は、今から4,000年前、縄文時代中期末の片上の地にあった縄文時代の集落。西日本で確認された縄文時代の集落跡では、住居跡などが良好な状態で残存しているなど研究上重要な遺跡のひとつ。
- ・丸山古墳は、吉井川の左岸の丘陵上に立地する古墳で舶載三角縁神獣鏡など31面もの鏡を出土したことで知られる。南北68m、東西55m、高さ9mの円墳。

②古代

- ・「延喜式」という平安中期に編纂された律令の施行細則、つまり格式によると、2013年、建国1,300年となる美作国の津は「片上」で、長縄手遺跡内では奈良時代の井戸杵も確認されている。

③中世

- ・奈良時代の仏塔ともいわれる「熊山遺跡」が形成された後に熊山山上に成立した「靈山寺」は、修験など中世の宗教的拠点ともなり、備前焼の生産を庇護したともいわれる。
- ・鹿久居島の千軒湾の入り江に位置する千軒遺跡は、縄文時代から中世にわたる遺跡で、特に鎌倉から室町期にかけて流通の拠点と推定されている。
- ・吉永の医王山城、三石城、片上の富田松山城、香登城など赤松氏、浦上氏らが跳梁跋扈した山城が備前地域に展開する。
- ・「兵庫北関入船納帳」には備前焼を積んだ船の記載があり、「片上」、「浦伊部」などの港湾名がみられる。浦伊部の「来住家」付近には備前焼の積み出し拠点があったことが推定されている。

④近世

- ・閑谷学校教授武元君立の兄、武元登々庵は菅茶山や頼山陽など多くの文人、学者と交流したことで知られている。
- ・第11代万代常閑の時、家伝の「延寿反魂丹」が富山に伝わり「越中富山の売薬の始祖」となる。子孫は片上で万代医院を経営していた。

- ・「お歯黒」の生産地として香登産は高級品として知られていた。
- ・近世山陽道の香登周辺は醸造業などで栄え、その富が香登教会や石井十次など慈善事業のスポンサー的役割を果たした。
- ・吉井川の坂根堰の歴史的景観

⑤近代

片上地区は柵原で産出した硫化鉄鉱石を積み出すためのルート片上鉄道と港湾施設が展開した地域。

三石地区は「日本の近代化を支えたまち三石の耐火煉瓦産業」で詳述。

【主な地域文化資源】

- ・備前緑陽高等学校の敷地に広がる「長縄手遺跡」
- ・国指定史跡「丸山古墳」や「天神山古墳」、西鶴山の低丘陵上に広がる古墳群
- ・国指定史跡「熊山遺跡(赤磐市)」を中心に、霊山寺跡、石積み群などの遺跡群
- ・県の重要遺跡「千軒遺跡」と古代体験の郷「まほろば」がある鹿久居島の千軒湾の入り江
- ・県史跡「三石城跡」、富田松山城跡(片上)、香登城跡、医王山城跡(吉永)などの山城群
- ・備前焼の積出拠点とされる浦伊部来住家と市指定史跡「伝太閤門跡」、妙圀寺
- ・近代化遺産で二次調査対象となった「万代医院」跡と万代常閑陶像(真光寺境内：伊勢崎陽山作)
- ・香登教会、武用ゴロベエ商店、大型の商家など香登の街並
- ・平成 14(2002)年に片鉄ロマン街道(サイクリングロード)として整備された片上鉄道のナローゲージ(狭軌)跡
- ・三石地区に残る近代化遺産やその景観
- ・明治政府のキリシタン禁令により 117 名が流罪となった地、鶴島
- ・大阪堂島との米相場の通信所跡といわれている寒河の天狗山山頂
- ・武元登々庵、君立兄弟の肖像画を所蔵する吉永美術館